

「嘘をつくことは罪である」か?

筑波大学名誉教授

水野 建雄

経歴: 昭和45~55 亜細亜大学助教授、教授
 昭和56~平成15 筑波大学哲学・思想系教授
 平成16.3 筑波大学哲学・思想学系定年退官
 平成16.4 八洲学園大学教授・生涯学習学部長
 (専門分野:家庭教育など)
 平成20.4 同大学教授・副学長
 平成25.3 同大学退職

1. 友人を助けるためとはいえ

嘘をついてはいけない

ドイツの高名な哲学者カント (I.Kant) の言葉のなかに、「嘘をつくことは罪である」というびっくりするような言葉があります。ここで、この言葉を手がかりにして道徳について少し考えてみましょう。カントはこう語ったのです。

「われわれの友人を人殺しが追いかけてきて、友人が家の中に逃げ込まなかったかとわれわれに尋ねた場合、この人殺しに対して嘘をつくことは罪である。」

本当のことを言えば友人は殺されるかもしれないまさにその時に、嘘を言ってはならない、嘘は



■カントのシルエット (ブットリヒ画)

罪である、とカントはいうのです。

だが、私たちは普通、家に逃げ込んだ危機迫る友人を助けるために「家にはいない」と嘘をつくでしょう。人命を助けるためには嘘はやむを得ないからです。もし嘘が罪であるなら、社会生活は不可能になってしまいます。

2. カントの道徳の考え方

しかし、こうした私たちの社会常識とは真逆に、カントはどこまでも「嘘をつくことは罪」だと主張します。フランス哲学者に対しても真っ向から批判しました。なぜでしょうか。その根底にはカント独特の道徳の考え方があります。

カントは、この刺客に対して「家にいない」と嘘をつけば友人は救われ、「家にいる」と真実をいえば殺されるという因果関係は成り立たないといえます。正直に「いる」と答えたあとで、友人がそっと外に出て行って刺客に出会わずに殺人行為が起らないということがあるかもしれません。

また「いない」と答え、実際に友人が外に出ており、その結果刺客が出ていく際に彼に出くわして犯行を加えることがあるかもしれません。だから、家にいるか否かの返答と、刺客に襲われるか否かの結果との間には因果関係はなく、偶然的なものです。

したがって、たとえ善意からにせよ、偶然を理由にして「嘘をつくべきだ」と強制することはできません。だからカントはこう言います。

「したがって、あらゆる陳述において、誠実（正直）であるということは、神聖で、無条件的に命令する理性命令であって、この命令はどのような都合があろうとも、それによって制約されることはない。」

誠実であること、正直であることは、偶然や状況に左右されない人間の絶対的な義務であるとカントは考えます。

「誠実であれ」、「正直であれ」と命令して、人間を道徳的行為へと導く人間内面の呼びかけをカントは「理性」といいます。雨が降ろうが槍が降ろうが、いかなる状況にあっても、それに屈せずに理性命令を遵守しようとする内面の良心（カントは「善意志」といいます）こそが道徳実現の核心です。

3. 道徳は、その時々都合や状況に左右されてはいけない

カントの道徳論は、内面の良心（善意志）だけに関係します。外面的状況は度外視されます。すなわち、ある行為が道徳的に善か悪かを決めるのは、その人の内面の良心（行為以前の動機の純粋性）だけであって、行為の結果の善悪からではないのです。その意味で、カントは動機主義者、主観主義者です。

行為する前の動機はどうであっても行為の結果が善ければいい、結果として人を救うことになるなら嘘をついてもよい、とする結果主義を、徹底的に批判します。それはご都合主義だからです。道徳を、時々都合によって守ったり守らなかったりしてはいけないのです。

要するにカントは道徳を、もっぱら行為以前の良心・善意志のレベルで考えていくのです。状況や結果に左右されない善き強き心貫徹しなさい、と呼びかけているのです。

だから、カントは嘘を認めません。それは結

果主義の発想から、道徳の法則に例外を作ることだからです。

4. カント道徳論の欠陥

それにしてもこれは特異な考えです。カントは結果として友人が殺されるか助かるかという外的状況は偶然的で、「嘘をつくな」という内面的な理性の命令こそが絶対的だといえます。このカントの説明を認めたとしても、次のような困った事態が生じる場合があります。

「約束を守れ」はいかなる場合にも遵守すべき義務であるとしても、例えば、1時に法廷に立たねばならない弁護士が、途上で子供の病気に会った場合、子供を救えば約束の時間に遅れるし、約束を優先すれば子供を救えないというジレンマが起こります。「約束を守れ」と「人を救え」という内面の義務が同時に生じて衝突を起こすこととなります。

この「義務の衝突」という事態が起こるのは、外的行為を度外視するからです。カントは「義務の衝突」は起きないといいますが、しかしこれは内面的動機の純粋性だけでは解決できない問題です。このことは善意志中心のカント道徳論の欠陥の一つといってよいと思います。



■イマヌエル・カント(1724-1804)
(['カントとケーニヒスベルク』(粹出版)より)